

## インド北東部ディラン周辺のモンパ族フィールドノート ——民間信仰を中心として——

鈴木 正 崇\*

Fieldnotes on Monpa People around Dirang in Northeast India:  
With Special Reference to the Folk Belief

SUZUKI Masataka

### 1 モンパとは

北東インドのアルナーチャル・プラデーシュ州 (Arunachal Pradesh) の西カメン県 (West Kameng District) のディラン (Dirang) 周辺に居住するモンパ (Monpa) 族の村を 2020 年 1 月に訪れた。本稿では民間信仰に焦点を当てて現地の諸相を紹介する。今回の訪問に先立ち、2019 年 3 月には、ディラン (標高 1500m) の町から谷を北に遡り、セ・ラ峠 (標高 4176m) を越えて、中国との国境に近いタワン県 (Tawang District) のモンパの村々を訪れた。タワンとディランのモンパは、衣装はほぼ同じだが言語は全く異なる。モンパとは自称ではなく、チベット中央部からみて南方地域のモンパの地、モンユル (Mon-yul) に住む人々の他称であった [Pertin 2014: 53]。漢語で南方の夷狄を意味する「蠻」に由来するともいう。集団ではなくカテゴリーで、異質な人々を包摂する総称になった。形質はモンゴロイド系である。インドでは制度上は指定トライブ、ST (Scheduled Tribe) に登録され、ディラン・モンパの人口は、2011 年の国勢調査では 7172 人であった。言語はツァンラ語 (Tshangla) で、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、ディランとカラクタンは、東ブータンの人々とはある程度は言語が通じる<sup>1)</sup>。ディランとその周辺のモンパは、シャールパ (Shārpā)、「東の人」とも呼ばれる<sup>2)</sup>。タワンの東方にあたる地域の人々を指す他称である。

\* 慶應義塾大学; Keio University, 2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345 / balangoda.1980-sripada@z2.keio.jp

- 1) この地域の言語に関して、ボット [Bodt 2014a: 203-204] は、ツァンラ語を東ブータンとディランに大別し、後者をディラン方言と、サンティ (Sangthi)・ナムシュ (Namshu)・テンバン (Thempang) 方言に二分した。タワン・モンパとツァンラ話者の中間地帯は、ブロクパ語で、東ブータンのメラ、サクテンと、アルナーチャル・プラデーシュのセンゲゾン (Senge Dzong)、ニュクマドン (Nyukmadung)、マゴー (Mago) に住む牧畜民が話者でチベット語に近いという。
- 2) ブータンのゾンカ語はツァンラ語者をシャルチョプカ (Sarchopkha)、「東の人」と呼ぶ。

## 2 ナムシュ村のラーソイシェーの祭り

訪問地はモンパが住むテンパン・サークル (Thempang Circle)<sup>3)</sup> のナムシュ村 (Namshu Dung), 人口約 1100 人, 160 戸である。斜面上に集村を形成し、一部の家は山腹に点在する。生業は畑作中心の農業で、小麦、トウモロコシ、大豆、蕎麦などを栽培し<sup>4)</sup>、家畜として牛を飼う。標高は 2000m から 2300m である。女性の上衣のトトゥン (tothung) の文様はタワンと同じで、後方に縞柄の腰当てを着け、ヤクの毛の帽子を被る。ナムシュにはチベット仏教のゲルク派の寺院、通称ナムシュ・ゴンパ (別称 Mang Gompa), 正式名タシ・ラブテン・ゴンパ (Trashi Rabten Gompa) があり村人の信仰を集めている。モンユルにゲルク派を広めた高僧、ロブサン・テンペイ・ドンメ (blo bzang bstan pa'i sgron me, 1475 ~ 1542 ?) の開創と伝える。高僧はタワンのロウ村にアリヤクダウン・ゴンパを開創し、次にカラクタンにタクルン・ゴンパ、三番目にナムシュ・ゴンパを開創したという<sup>5)</sup>。寺院の後方にテンペイ・ドンメが、闇の中に輝く火を見てこの地に到達し、修行場として瞑想した場所とされる白い石がある。寺院の本尊は巨大な弥勒菩薩 (チャンパ) である。

訪村の目的は、ナムシュでラーソイシェー (Lhasöshe) の大祭を見学することであった<sup>6)</sup>。毎年祭りは小規模で、3 年に一度が大祭となる。ラー (Lha) は神々の総称で天空から降りてくる<sup>7)</sup>。ソイシェーは神々を祀り和め崇拝することで、健康、幸福、繁栄、豊作、雨乞い、悪霊祓いなど多様な祈りがなされる。数多くの神々の中でも、高所に居ます神、フー (Phu) の信仰が重要で<sup>8)</sup>、村の背後に聳える二つの山の神、男神のアタ・ナムロク (Ata Namrok)<sup>9)</sup> と、女神のアマ・ジョモ (Ama Jomo) が主神である<sup>10)</sup>。アタとアマは祖父と祖母の意味で夫婦という言い伝えがある。ボットによれば [Bodt 2020: 90], この地域ではジョモには高貴な女性、女王、高位の女性、女神、尼などの意味があり、山の女神の一般的名称で、地元の神と対になって祀られるという。ナムシュの人々はチベット仏教の影響を深く受けているが、ラーソイシェーの祭りは民間信仰で、山や森や水への信仰が根底にある<sup>11)</sup>。

3) 西カメン県は行政区として 13 のサークルに分かれる。

4) 1989 年頃からキャベツ、1998 年頃からジャガイモを商品作物として栽培している。

5) 水野はタワン僧院を開創したメラ・ラマの創建と記すが間違いである [水野 2012: 80]。

6) ナムシュの祭りには 2010 年 12 月に見学した小林尚礼の報告がある [小林 2013, 2020]。今回は訂正を施し新たな知見を付け加えた。ただし、「森のチベット」という表現には違和感がある。ナムシュはチベット文化圏ではあるが、言語も習俗も異なる。

7) シーパイラー・ボンの信仰地域 (タワン、ディラン、東ブータン) の起源神話では、ラーを空から降りてくる神とする考え方が共通する [Huber 2020: 439]。

8) 特定地域の最も高い所にいる神がフーで、広義には山の神になる。

9) 小林はアター・ナンブロ (Ata Nambro) と記述している。

10) 山々は村の正面、北から南へアタ・ナムロク、アマ・ジョモ、フー・シュルブ (Phu Shurp), アタ・コティ (Ata Khoti) と連なり村を守護する。シュルブは瀧の意味である。

11) 小林はタワンやジミタン、東ブータンのダンリン・ツォ、インド北部のラダックなど地域も文脈も異なる事例を出して自然信仰の聖地の類似性を指摘している。

祭りの初日はチベット暦の 11 月 16 日（西暦 2020 年 1 月 11 日）で、祭りに関わる家では、山の神に捧げる多くの種類の供物を用意する。供物では川魚（nga ンガ）で重要で、村の下方を流れるカメン川で釣り上げる。巨大な魚は生のまま捧げ、多くは焼き魚にする。この祭りは「魚の祭り」である。高地に住むヤクも重要で牧畜民のブ Rokpa（Brokpa）から譲りうけ、ヤクの肉を調理し、トウモロコシの粉や香辛料を詰めてゆでた腸詰め（ジュマ）を作る。小麦粉（パ）で作る揚げパン（カプゼ）は細長いものや円盤の形に作り、紐を通して大きな輪にする。シェー（輪）と呼ばれる。小麦粉を練り合わせて動物や人形を作り籠に並べる。これをノルナカという。昔は、山羊、羊、牛、鶏を供儀していたが、仏教の教え、特に不殺生戒の教えを取り込んで禁止して作



写真 1 ナムシュ 家々の供物

り物に変えたという。蕎麦を茹でたプタン、トウモロコシ、サトウキビ、蒸留酒のアラムも供える。山の幸、川の幸、畑の幸、森の幸などを網羅し、生活実態が浮かび上がる供物である（写真 1）。ナムシュの人々は、牧畜民からヤクのバターやチーズ・肉・毛皮、焼香に用いる樹木を、穀物や布や農具などと交換で手に入れる<sup>12)</sup>。農耕民と牧畜民の交換経済が暮らしを支えている。

午後 7 時過ぎに、村の祭司のアタ・ナムロク・プラーミー（Namrok Prahme）と村の幹部が、村の上手に位置する「神の家」、ラブラン（Lhabrang）に集まる（標高 2044m）。祭司は主神の山の神をはじめ周囲の川の神、森の神、水の神など全ての神々を招く。ラブランの住人は上位クラン（clan 氏族）のパパー（bapu）に所属し、2 つのクランのうちのコチル（khochilu）の系統とされる<sup>13)</sup>。クランは父系氏族集団で、地元ではツァン（tshan）という<sup>14)</sup>。

### 3 各家への訪問

ラーソイシェーの 2 日目（1 月 12 日）は、祭司が真夜中に祭りの「主人役」の家であるラ

12) 標高 3000m のチャンダル村（Chandar）やカリボク村（Khalibok）の牧畜民から入手する。

13) 古いラブランは山麓の家であったが、ここもコチルであった。

14) ボットは父系出自集団（patrilineal descent group）とする [Bodt 2014b: 160]。地元では英語では共通の祖先の子孫を持つ clan と表記するが、実際には単系でも族外婚でもなく、言語の共通性や地理的起源の同一に基づく集団だという。フーバーは、tshan は「同じ骨を共有する親族単位」の意味で、骨（khang）の繋がりによる父系継承を重視するチベット系の人々の民俗生殖論との共通性があると示唆する [Huber 2020: 428]。

ブランから出発して、明け方まで家々を訪問して室内で神々を祀る。来訪神の行事とも言える。訪問者は、二人の祭司、男神のアタ・ナムロクを祀るプラーミーと、女神のアマ・ジョモを祀るプラーミーが主役で、二人の助手のツァンミー（changmi）が付き添う。祭りは本来は、アマ・ジョモ・プラーミーの担当だが、老齢で十分に儀礼を行えず知識も乏しいので、アタ・ナムロク・プラーミーの祭司が行っている。祭司らは午前2時に出発して、クレカン（krekhang）と呼ばれる17戸の家（元は18戸）を順番に訪問して祈願する。助手のツァンミーが神の使いの雄の羊（ジョム・ラワ）を引いて先頭にたち<sup>15)</sup>、2人のプラーミーと助手、村長のガンブラー（gaon burah）の5人が一列縦隊になって、「へーへーホッホ」と声を上げ道を巡って家の中に入っていく（写真2）。行列を先導



写真2 ナムシュ 早朝の家巡り

する雄の羊はアマ・ジョモの乗り物というが、元々は山羊を捧げた供犠の名残という伝えもある。各家の中の祭壇は山のような供物で溢れている。祭司と助手、そして村の役職者は、祭壇の前に設けられた特別席に、カター（白布）を掛けられて座る。祭司のアタ・ナムロクは鐘を振り祭文を唱え、平安と健康の祈願をして3年分の豊作を願う。聖水を撒き、供



写真3 ナムシュ 家での祈願

物と参加者を清めて家族の安寧を祈る（写真3）。最後に小麦粉を振りかけて祝福する。一軒の家の滞在時間は20分から30分程度である。訪問するクレカンは、チベットの支配下にあった時に、ツォナ・ゾン（現中国領）に納める税のクレイ（khrail）<sup>16)</sup>を支払っていた家で、村を構成する世襲の有力者である。近くの城砦、ディラン・ゾン（Dirang Dzong）には、イン

15) 羊を引く人をゴーミン（gomin）という。元々は山羊であったという。現在は、祭りでは1年目と2年目は牛、3年目は羊を捧げる。

16) クレイはツァンラ語、モンケット語はクレ（khre）である。米・小麦・大麦・アワ・トウモロコシなどの穀物の他、バターや特産物の場合もあった [脇田 2019: 85]。



ド独立の 1947 年頃まで、チベットから派遣されていた徴税官（ゾンベン）がいて、各地域で農作物などの現物を税として集め、ディラン・ゾンからセンゲ・ゾン（Senge Dzong）、タワンのギャンカル・ゾン（Gyangkhar Dzong）を経由し、ツォナ・ゾンを経て、ラサに送っていた。古い政治制度の名残がみられる。家回りには午前 5 時 30 分から参加し、7 時過ぎまでつきあった。早朝には終了する決まりである。各家では訪問者が立ち去った後に朝食をとり準備を整えて供物を運べるように籠に入れて神木への行列に備える。

#### 4 神木のある祭場

午前 10 時過ぎに神木がある山の中腹の祭場に向けて村人は歩き出す。村人は籠の中に沢山の供物を入れて背中に背負い、村の上部のラブランの家の上部にあるマニ壁（経文壁）の前の広場に集合する。村人が集合すると、山に向かって祈願してから、神木（ラーシン）のある祭場に向かって出発する。山の斜面を「ジュンシュッポー」という独特の掛け声をかけて登っていく。吹奏器ラッドンが吹き鳴らされ、長い行列が続く（写真 4）。大きく枝を広げた神木のコナラ属の樫（oak）の古樹がある祭場（標高 2125m）に到着する。村人は樹下に供物を置く。クランごとに座る場所が決まっていて、上から下へ、ドンドッパ（dungthopa）、コチル（kochil）、ツアルム（tsarmu）、コム（komu）で、神木はコチルとツアルムの席の間に位置する。ドンドッパとコチルは上位クランのバプー（bapū）の系統、ツアルムとコムは下位クランのギラ（gila）の系統であり、相互の上下の身分関係が明示される。バプーは東方のテンバン村（Thembang）からの移住者で、先住民のギラの上位に立つ。

斜面に沿った 18 本の木に供物を吊り下げる。小麦粉で作った動物や人形の供物のノルナカは串刺しにして、揚げパンと果物（ミカン、リンゴ、バナナ、パイナップル、ココナツ、サトウキビ）、生の魚と焼き魚は紐に通して輪（シェー）のようにして掛ける。ヤクの腸詰も供える。供物は鈴なりにして豊かさを表し、作物の豊作や家畜と人間の多産を祈るのである。樹木の脇の祭壇にはツェムダール（tsemдар）という古い用の水を張った皿をクレカンの数に合わせて 18 個置き、太陽・月・星の形をしたバターを浮かべて神の意志を知る占いをする。バターが自然と集まってくれば団結力が強くなり、離散すれば凶とされる。供物を供えて神の意志を確かめるのである（写真 5）。

アタ・ナムロクの祭壇は斜面上方



写真 4 ナムシュ 神木に向かう

に石組があり、その前に供物が供えられる。トウモロコシのポップコーンが18の袋に入れて供えられる。アタ・ナムロク・プラーミーが祭文を唱えて斜面上方の山の神に向かって祈りを捧げる。18の数は徴税単位のクレカンの家の数を表し、村の有力者の健康や繁栄を願う。旧チベット統治時代における政治権力の記憶を現在に伝える。アタ・ナムロクへ



写真5 ナムシュ パターの占い

の祈願が終了した後に、アマ・ジョモへの祈願を行う。祭壇は神木の下にしつらえ、洞や石に供物を捧げ、アマ・ジョモ・プラーミーが祭文を唱えて祈る。アタ・ナムロクとアマ・ジョモのプラーミーは、世襲で継承されるが、クランは異なる。祭場も山の斜面と樹下の祭場に分かれて祀る。

祈願の終了後は、飲み食べ歌い踊る大宴会が、神木の下で、午後4時過ぎの日暮れ前まで繰り広げられる。老若男女が一緒になって騒ぐ。祭りの時には故郷の村に戻ってきた若者は、カラオケのアンブを持ち込み、ブータンやヒンドゥーのポップスを歌い踊る。若者にはブータン・ポップスの人気が高い。娯楽には現代の都市の生活様式が直接に持ち込まれている。ただし、参加者は、クレカンの血縁や姻戚など村の有力者に限られている。

## 5 祭場からの神送り

ラーソイシェーの神送りは、午後3時過ぎに、村人がご神木の西側に一列に立って五色の幡を振ることから始まる。吹奏器ラッドンによる奏楽が鳴り響く。神木の西側に立てて置いた盾(gyen ギエン)と槍(tringkang トウリンカン)を二人一組になって持つ。この組を「槍を持つ者」、ギエンパと呼ぶ。二人が対になり、一人が槍、一人が盾と小刀をもって幡を振り回す。戦闘の踊り(gyen jongbo ギエンジョンボ)で前方の敵と戦う様相を演じ、「ウーホホ」という笑いにも似た奇声を上げて飛び回る。東西南北の四方で所作を繰り返す。悪いものは南方に追い祓う。悪霊祓いである。最後は西方の丘に駆け上って神々を山へと送る(写真6)。村人はギエンパの前や上に行かないように注意される。危険な力が満ちる異界の地なのである。9組のギエンパが一回ずつ9回、その後は2組になって四回、最後は全員が行う。ギエンは神のお使いで神を守る祭具である<sup>17)</sup>。神送りの終了後、供物が樹木からおろされ、祭

17) 小林によれば「馬の頭」をかたどるという[小林 2013: 146]。

場の席の後片づけを完了する。祭りの名残を惜しんだ後、籠に入れて村人は帰っていく。

後片づけの後、暗闇の迫る中、ギエンパは円陣を組み、再度、立ち去らぬ神を送り届けるために踊る。「立ち上がりなさい」の意味の「アララヘー、アララホー」の掛け声がかかり、戦さに行く準備をせよと鼓舞する。ギエンパは、順番とクランが決まってい



写真 6 ナムシュ 神木の祭場の神送り

て、①ラブラン(コチル)、②アタ・ナムロク・プラーミー(ツアルム)、③アマ・ジョモ・プラーミー(コム)、④クレカン(ドゥントッパ)、⑤クレカン(ドゥントッパ)、⑥クレカン(ツアルム)、⑦クレカン(ツアルム)、⑧クレカン(ツアルム)、⑨クレカン(コム)である(括弧内はクラン)。一番目はバプー(上位クラン)出身の「神の家」のラブラン、二番目と三番目はギラ(下位クラン)出身の二人の祭司、以下は祭りの担い手のクレカン 17 戸の若者の中から選ばれる。その構成には村の社会構成、民間信仰、歴史的経緯の諸相が反映する。

神送りの後、9 組は隊列を組んで祭場からの帰途につき、暗闇の中、山から下っていく。途中でナムシュ・ゴンバ寺院の脇にある水の神、ルー(Klu)を祀る所で円陣を組んで踊る。聖水として儀礼に使われる。最後は午後 6 時過ぎにラブランの家に戻って室内に入り敷板を踏み轟かす。締めくくりはこれまでの総決算のような豪快な戦闘の踊りであった。

## 6 供え物集め

祭りの 3 日目(1 月 13 日)は山の神への神饌、カズィ(khazie)の調理のために、ギエンパの若者がクレカンの家々を巡って食材を均等に集める。ギエンパたちは、午前 10 時過ぎに「神の家」ラブランに集まる。室内の神聖な囲炉裏の上に色鮮やかな布を巻き付けたギエンパが掛けてあり、サン(ビャクシン属)に火をつけて煙をくゆらせて神々を招く。神々は毎日、周囲の山や森などから招かれる。9 人のギエンパは、ギエンを背負い槍を持ってラブランを出発する。行列の先頭はラブランの若者が務める(写真 7)。隊列を組み、槍を地面に刺し、鈴を鳴らして「アララヘー、アララホー」と叫び、17 戸のクレカンの家々を次々に訪問する。ギエンは神の乗り物で人々は神々の訪れに擬せられる。家の玄関の前には、ビャクシン属の木を束ねて布をかけた作り物を置いたり、花を浮かべた水盤も置かれ、神々の到来を迎える準備が整っている。

最初の家は、アタ・ナムロク・プラーミーの家である。家のベランダから中に舞い込んで、

敷板を踏み鳴らし神歌を歌う。思いつき足を踏み鳴らす。この時に、床が壊れても若者には家に対しての賠償の義務はなく、家の維持管理を怠った家主が罰金を払う約束である。これをギェン・ジョンボ（戦闘の踊り）という。神歌は家に入る前、中に入ってから二度歌う。ギェンパは歓迎の印として、顔に小麦粉をなすりつけられ、カターを掛けられる。着席



写真7 ナムシュ 食材を集めて各家を訪問

するとご馳走と大量の酒でもてなされ酩酊する。ギェンパの各家での仕事は、神が好む神饌のカズィを調理する食材を均等に集めることである。川魚を第一とし、切り干し大根、ショウガ、塩（インチャ）、トウガラシ（ソル）、ヤク・チュラ（ヤクのチーズ）、リビ・チュラ（乾燥納豆）を集める。チーズと納豆はモンパの嗜好品である。特に重要なのは魚で、ラブラン家で用意した魚を天秤で計量して、同等の重さの魚でないと受け取らない。付き添いの者が、各家に現物の魚と秤を持参して天秤で計量する。食材はそれぞれ袋に入れて持つので、徐々に重みが加わっていく。

クレカンの家々は村内に点在しており、集村部だけでなく、少し離れた耕作地を登って村の最上部に位置する一軒家まで訪問する。玄関の前に、三角形の石が置いてあって、先頭のギェンパが足で壊すという所作を行う家もあった。これは古い慣行で悪霊を祓って入る意味があるとされ、老人が住む家でしか行っていないとのことであった。午後3時過ぎにラブランに戻る。最後の17戸目にあたる。食材集めはこの家で終了する。

## 7 神饌作りと神送り

ギェンパはラブランの家の屋内で踊った後に遅い昼食をとる。その後、家の裏手のベランダに移って、各家々で集めて籠や箆に盛り上げた食材を使って神饌のカズィの調理に取り掛かる。トウガラシは杵（イドンダン）を使って臼（ルー）ですり潰し、ヤクのチーズと乾燥納豆、ショウガと塩を混ぜる。川魚は細かく揉み解して骨をとり、切り干し大根を混ぜる。最後に調味料を入れ全ての食材を一緒にして混ぜ合わせるとカズィができあがる。神が好む「うまい供物」で、栄養価は満点である。夕闇が迫る午後5時少し前に、ラブランの上にあるマニ壁に沿ってプラーミーやその助手、村の役職者が腰を掛ける。その前に神饌のカズィを置き、アタ・ナムロクとアマ・ジョモのプラーミーが上座に座って神送りが始まる。

村を見下ろす祭場で山に向かって祭司の祈願が行われ神歌を歌う。その後に、ギェンを背



負ったラブランの若者を中心に 8 人の若者が長老の歌に合わせて地中に刀を突き刺す。前日と同様にギェンパは二人一組になり、「アララヘー、アララホー」の掛け声に合わせて、先頭が盾と刀、後方が槍を持ち、幡を翻して踊り、場内の四方を清めた後に、丘の上方に駆け上がっていく。形式は昨日と同じだが、この日は 8 組で構成される。ラブランを訪れた神のうち、最後の一つだけ、祭りの 3 日目に特別丁寧に神送りされる<sup>18)</sup>。この間、集まった村人に神饌のカズィとトウモロコシで作った蒸留酒のアラが振舞われる（写真 8）。カズィは美味であることはわかっているが、作成の時に、地元の生水を入れたので、我々外来者にとっては腹痛覚悟の「度胸試し」となる。神送りの後は、村人は家々に戻る。各家では大宴会と歌合戦が夜遅くまで続く。無礼講の宴であった。



写真 8 ナムシュ 神饌配り



写真 9 ナムシュ 神送り

ラーソイシェーの 4 日目 (1 月 14 日), ラブラン家を守護する神だけを送るギェン・ノンシーが行われる。12 時過ぎに祭司と村の役職者がラブラン家の上部のマニ壁前の広場に集まり、ギェンパによる神送りが始まる。「神の家」ラブランの若者が一人だけで行う。神歌に合わせて小刀で地面を突き刺し、戦闘の踊りで悪霊を祓い神を山に送り返す（写真 9）。あまり時間はかからない。その後、ギェンパはクランの首長の家に集まって、神の乗り物、ギェンの解体を行い、全てが終了する。ギェンの解体は慎重に丁寧に行われ、神の乗り物の祭具であることが実感できる。歴史の記憶はモノに凝結して伝えられて次の世代に託されるのである。

## 8 ナムシュ村の歴史と民間信仰

ラーソイシェーの祭りでの信仰対象は村の背後に聳えるなだらかな二つの山で、村の暮ら

18) 小林はこの日に送られるのはラブランの守護神であるロゴスダクパだというのが [小林 2013: 148], 現地では確認できなかった。この神は村の上部の森の石を神座とする。

しを支える水の源でもある。小川はチュン溪谷（Chung）に注ぐ。伝承によれば、先住民はツアルモの人々でアタ・ナムロクの山の神を信仰して狩猟採集と畑作で暮らしていた<sup>19)</sup>。現在も多くの土地を所有して他の村人に賃貸させている。その後に牧畜民のブロクパのコムがチベットからきて、アマ・ジョモの山の神を祀ったという。東ブータンのメラ（Merak, 標高 3500m）の山の神、アマ・ジョモの信仰に由来するという伝承もある。メラのブロクパは、南方に聳えるジョモ・クンカル山（Jomo kunkhar 宮殿, 標高 4310m）の女神アマ・ジョモの信仰を厳格に守る<sup>20)</sup>。メラからの移住とすれば信仰を伝えた可能性もあるが、アマ・ジョモはディラン地域では、山の女神の一般名称である。ナムシュの山の神のアタ・ナムロクとアマ・ジョモは夫婦という伝承は、移住者と先住民との融和を伝えるのであろう。アタ・ナムロク・プラーミーはツアルムの出身、アマ・ジョモ・プラーミーはコムの出身の血筋が世襲する。ギラに属するツアルムとコムが生活していた村に、近くのテンバン村からバプーに属するコチルが移住して先住民を従属させ、最後にバプーのドゥントッパがきたという。コチルとドゥントッパの婚姻は不可（族外婚）とされる。バプーはヒンディーの男性敬称、バプー（babū）に由来する語と思われる。現在の祭りの中心になるラブランの家の人々はコチルに属する。祭りでは、バプーの政治とギラの祭祀という相補性が確認され、村の歴史が反映している。ボット [Bodt 2014b: 180-181] によれば、ナムシュとリシュ（Lish, 自称 Khispi キスピー）の村人は、アッサム平原部で栄えたカチャリ（Kachari）王国の奴隷の子孫で、各々テンバンとディランの城砦（ゾン）を築くための石工として動員され、後には物資の運搬人として働いたという<sup>21)</sup>。ナムシュの人々は、チベット人、ツァンラ、ブロクパの混血で形成されたとする。

山の信仰には水の恵みへの感謝も籠められ、森にはコナラ属の榎の木が多く、落ち葉は農地の堆肥に使われる。ラーソイシェーの祭りの終了後、3日後から落ち葉の採集が許され、1月から3月まで集める。神一般はラーと呼ばれる。最も高い山を居所とする神はフー（phu）といい畏怖される [Bodt 2020: 170-171]。ナムシュではフーを守護する精霊がおり、ダーマドン、ロゴスンダクパ、ダージャントンリで、各々が山麓の石、洞窟、小川を居所とする。

19) 小林はナムシュがブータンとの戦いに負けて誰もいなくなり、その後にアッサム出身者がきたと報告している [小林 2013: 150]。

20) メラでは、ブータン暦の7月15日から8月15日の間の吉日に山に登って神を祀るアマ・ジョモ・コラの祭りを行う。山は女人禁制で、女性は山頂直下のラル・ツォ（魂の湖）で遥拝し食物と小麦の粉で作った供物のトゥルマを供えて祈願する。禁忌があり、家族に死者が出た場合は三年間は登れない、村内に死者が出たり出産があると三日間は登れない。登拝中は豚・鶏・鶏卵・ニンニク・玉ねぎ、煙草は禁忌で、月経中の女性は参加できない。毎年3回のジョモ・ドクサルという山の神祭りを村内で行う。供物を捧げ半僧半俗の世襲のゴムチェン（Gomchen）が祈りを捧げ男根風の木を祭具を据えて祀る。

21) 言語も西コバ語（Western Kho-Bwa）で、徐々にツァンラ語に同化したという [Bodt 2014b: 179]。

ロゴスンダクパは悪霊の主であるが、村の守護神でもあり、最後の日の神送りにはこの精霊のみを山に送るとも言う。ダージャントンリは村から 10 km 離れた小川に祀られている。ナムシュ村と先住民文化との関連は色濃く残る。ギェンパの踊りは、北東インドの各地に居住する山地民の首狩りの戦闘舞踊と類似している。村の古い家の上部の装飾には蛇の造形や水牛の角が飾られ、テンバンではミトゥン牛(mithun)を供犠して神に捧げる。こうした習俗は、狩猟採集や焼畑を行ってきたミジ (Miji), アカ (Aka), ガロ (Galo), ニシ (Nishi), アパタニ (Apatani), ナガランド (Nagaland) の諸族などと共通している。ナムシュでは、チベットの牧畜文化、ヒンドゥーの農耕文化、先住民の狩猟採集文化が融合しているのであろう。

ナムシュの東方にあるテンバン村 (標高 2180m) では、6 年に一度、ラーソイシェー (Lhasöshe) の祭りが行われる<sup>22)</sup>。上位クランのバプーが行い、数か月後に下位クランのギラが行う。フーバーが 2011 年に調査したバプーの祭りの報告は詳細である [Huber 2020: 425-495]。テンバンは山上に城塞 (Dzong) を形成し、周囲は壁に囲まれ、古い石造りの住居が多数あり、北と南には門が残っている<sup>23)</sup>。南門には悪霊除けと豊穡多産を願う男根状の木がぶら下がっていた。南門下の広場はリツァン・タンカ (Rizang Thangka) といいシェルドウクペン (Sherdukupen) と戦った古戦場だという。城塞内は 67 戸、城塞外は 35 戸であった (2019 年 4 月調査)。父系クランの階層社会を構成し、上位クランはバプーで、コチル (khochilu), シャルチョッパ (sharchokpa), アタジェブ (atajipu), ディルクippa (dirkhipa) の四つからなる。下位クランはギラといい、内訳はコチルの従者のムラクパ (murakpa) とロプソンガ (lhopsonga), シャルチョッパの従者のシャルム (sharmu) とメラクパ (merakpa), アタジブとディルクippa の従者のニムソンガ (nymdong) であった [Huber 2020: 429]。バプーはラーを守護神として祀り、ギラはアマ・ジョモを守護神にする。祭りでは周囲の民族、サルタンパ (Sartangpa) やアカ (Aka) が従属して協力する<sup>24)</sup>。ミジを使う悪霊祓いの儀礼も 5 月に行われる<sup>25)</sup>。平等性を基本とする周囲の村人は、階層社会のテンバンの村人とのつきあいは難しいと言う。他方、ナムシュの祭りの中核であるクレカンのクランは、ツアルム 5 戸、コム 4 戸、コチル 5 戸、ドンドッパ 3 戸で組織され、バプーとギラが協力して当番制で平等性を基本に

22) 水野の 2011 年の報告 [水野 2012: 108 - 114] のラスシ (Lasushi) はラーソイシェーの間違いである。

23) 州政府は、テンバンをアパタニ族のズイロ盆地と共に、世界遺産候補とする申請を継続している。アパタニの近況については、[鈴木 2020: 267-288] を参照されたい。

24) アカはテンバンの護衛を務め、祭りの最後には神に捧げたミトゥン牛をもらう。ミジのチンダンの祭りにはヤクを持って行く。

25) 毎年 5 月のホシナ (Hoyshina) の儀礼では、家々から壊れた皿や茶碗を集めて破棄して悪霊を祓い、ミジの衣装をまとった若者が供物を各家からホシナ・ホシナと叫んで巡り、最後に人身供犠に擬した羊の血を付けた人形を弓矢で射る [Bodt 2014b: 181-182]。アッサムのカチャリからの税の取り立てを記念し、カチャリの黒魔術を防御する祭りである。水野一晴の報告では単に悪霊祓いとしている [水野 2020: 274-286]。

運営されている。テンパンのラーソイシェーでは、バプーとギラの儀礼は別々で、バプーの祭りでは、クレカン为基础としたツェションパ (tsheshomba) 14 戸が、4 つのクランの中から選ばれて儀礼の中核を担い [Huber 2020: 445-446]、階層差が目に見える形で表出する<sup>26)</sup>。

## 9 ラフン村

ナムシュ村の4日間の滞在中に、ディランの町の下方、サルタンパが住むラフン村 (Rahung)<sup>27)</sup>でも山の神の祭りが行われるとの情報がはいり移動を開始した。ラフン村は、1959年にダライ・ラマ14世がチベットを脱出してインドに亡命した時に、疲労困憊して病気になる4月11・12日の二日間滞在した村である。滞在中に動物供儀の儀礼が行われたのを見て、仏教の非殺生の教えを説いてやめさせたと伝えられる。ダライ・ラマ14世が滞在した家の跡にはマニ壁が残り将来は寺院を建立する予定という。

サルタンパは、元々はブート・モンパ (But Monpa) と呼ばれていた<sup>28)</sup>。この名称はブート (But) という村落名称に由来し、同じ言語を話す人々の総称にもなっていたが、ヒンディー語のブータ (幽霊) を連想させるので、1984年にブート村はジェリガオン (Jerigaon) と改名し<sup>29)</sup>、それ以後、ブート・モンパの名称は使わなくなった。現在はモンパとは別の集団で、サルタンパであると主張している<sup>30)</sup>。言語はカラクタン (Kalaktang) に住むシェルドゥクペンと同系統とされる [Huber 2020: 538; Bodt 2014a: 223]<sup>31)</sup>。

ラフン村は2001年の統計では人口1082人であったが、ボットの調査時は約600人 [Bodt 2014a: 225]、現在は総数38戸で、そのうち2戸だけ村で生活し、大半の人々は出稼ぎに従事する。村人の多くが戻るのは一年に一度の祭りの時だけである。祭りの名称はロウ・セーボ (Loh-Sheba) といい、ロウは畏怖する神、セーボは供物で神々への奉献を意味する<sup>32)</sup>。ナムシュのラーとラフンのロウは同様に神である。祭りは5日間続くが、参加したのは2日目だけで全貌を掴むまでには至らなかった。初日の神迎えは外部者の村への立ち入りは禁止というので参加せず、2日目に間に合うように、早朝にディランの町を出て谷間に入りラフン

26) 類似する山の神の儀礼としては、ディラン・ゾンでは、大祭のチスソイシ (Chisesoiyshi) が8月と12月に1日だけ行われ、8人の祭司が3つの山の神を祀り、少女と牛が二神に、羊が一神に捧げられる [水野 2012: 115]。

27) Rahung (ラフン) は rah (米) と ung (耕地) の合成語だという [Dutta and Tripathy 2008: 275]。

28) 国勢調査の人口統計では、1981年は348、1991年は665、2011年は255である [Bodt 2014a: 215; 脇田 2019: 103, 118]。

29) 人間 (jiring) の村 (gav) の意味である [Bodt 2014b: 166]。

30) サルタンパの村は、西から東へ、ラフン、クイタン (Khuitam)、ジェリガオン、コイナ (Khoina) である [Bodt 2014a: 207]。サルタンの概要は、[Bodt 2014a: 223-228] 参照。

31) フーバーは、コバ語 (Kho-Bwa) だという [Huber 2020: 313]。

32) フーバーは、儀礼を祖先の祭り、チクサビュウ (Chiksaybu) としており、シェルドゥクペンのキクサバ (Khiksaba) と同様の祭りとする [Huber 2020: 538]。



に向かった（1 月 15 日）。

ラフンは、ゴングリ川（Gongri）の南岸、尾根の上に立地する集落である。村に入る手前の小高い丘で祭司が儀礼を開始し、三方向を草と竹で覆った囲い（shalung）の中に座って山の方を向いて祭文を唱えていた。ここはラブラン、「神の家」と呼ばれ、祭祀の中心となる場所であった。向かいの谷の彼方に聳える山の神のフーを祀る。マンジャンマニ（Manjan Mani）という。供物には神が好む大きな川魚を必ず供える。祭司はツオブツイドップ（Chopji dop）と称し、頭に橙色の二本の角状の頭巾を被り長髪で、孔雀の羽根を刺し、白布と黄布のカターをまとう。腰には犀鳥（hornbill）の角と虎の皮をつけていた（写真 10）。祭司はコイナ村（Khoina）から招かれ [Bodt 2014b: 167]<sup>33)</sup>、ラブランの祭場で



写真 10 ラフン 祭司

の儀礼を取り仕切る<sup>34)</sup>。呪いをかける霊力が強いと言われ悪霊祓いも行う。前日（1 月 14 日）には、下方の川に行き神招きを行い、そこで一晩過ごした後に、早朝にラブランにきて儀礼を開始したという。年齢は 84 歳、老齢にもかかわらず元気であった。後継者はなく祭祀の継続は危ぶまれる。

## 10 村から丘へ

ラフン村のロウ・セーボの祭りの 2 日目、村での行事はクランの代表者の家での祈願から始まる。クランは 7 つで、①ナンポー（nampo）、②タドゥン（thadung）、③チリンドゥ（chiringdu）、④サンプム（sambön ngoimu）、⑤カシ（kasi sarmu）、⑥パボム（pabom sarmu）、⑦ペイキー（peiki sarmu）で、①と②は婚姻不可、③と④は婚姻不可、⑤は⑥⑦と婚姻不可という<sup>35)</sup>。村の儀礼執行者はロモ（Room）といい、家の中の祭壇のフー・ミサンラーダン（phu misang lhadang）の前に山の神への供物をバナナの葉で包み籠に入れて供える。供物を清めるチョッチュンボ（Chokcaungbo）儀礼が始まる。水を上げるジョハブロッ

33) 儀礼執行者のロモとツオブツイドックは、各々ナンポー・クランとタドゥン・クランの出身である [Bodt 2014b: 167]。

34) テンパンのラーソイシェーでも招かれる。プラーミー（Pramhme）と呼ばれ、悪霊のタン（tang）を統御する。パプー出身のプロバ（Bropa）とブロモ（Bromo）よりも劣位に置かれ、下位クランのギラが宿泊と賄いを提供する [Huber 2020: 443-444]。不幸と結びつく。

35) クランの表記は、聞き書きの資料をボットの報告 [Bodt 2014b: 167] で修正した。

ク (johabrok), 供花のロメントウ (lhowmento), プロクプグホク (brokpughok) と続く。ロモの中には背中に獣皮を背負う人もいる。麴入りの米を臼に入れて、ファウンというバナナの葉を巻いた棒で突きながら呪文を唱える。供物は、川魚、トウモロコシの蒸留酒、米のドブロク酒、トウモロコシの爆ぜたもの (ポップコーン)、ヤクのチーズなどで、二つの山の神、マンジャンマニとダーダブザントゥギュウ (Dadabzengthongyu) に捧げて祈る。両神は兄と弟で、村の向かいの二つの山に棲む。この水源の山から流れ下る沢水が村人の生活を支える「いのちの源泉」である。サン (ビャクシン属) で焼香して神迎えをする<sup>36)</sup>。

重要な供物は川魚で、前日サイコロで捕獲してよいいかどうかを占い、可となれば、4人の選ばれた人が夜間に魚を獲りに行って、祭りの当日に森の中の祭場、ラブランの祭壇に捧げる。ラブランで供物にする魚は、大魚三匹と決まっていて、フーヘという名称で呼ばれる。山の神の祭りは、「魚の祭り」でもあり、作物や魚を齎す水への感謝の気持ちも籠められる。

クランの代表者の家々にはラモが一人ずつ招かれて、家族や氏族の健康や安全を祈る。儀礼が終わると村人は盛装して供物を持って、村の上部にある中央広場、チョクス (choksu) に集まる。下部には村人の集会場のマンブランがあり村の中心である。中央広場には、独特の形の石が祀られ山の神の遥拝所になっていて、周囲には祭りの役職が座る石の座席が用意されている。3人の男性祭司、プロパ (Bropa) (写真11) と、その脇にプロモ (Bromo) と呼ばれる若い2人の少女がつく (写真12)。プロモは村人から選ばれた初潮前の12歳の少女で、山



写真11 ラブン 祭司プロパ



写真12 ラブン 少女プロモ

36) 毎月の満月の日、15日にビャクシン属の木を焚いて煙を出して神々を祀る。石楠花も焼香に使う。

の神の両神に捧げられる。背中に草を巻き付け、子どもを背負った格好にして、豊饒多産と、穀物の豊作の願いを託し、頬には黒い印を特別につける。ブロモがこの形式で参加するのは、毎年、神に奉納していた牛が年老いて死んで、新しい牛を選んで捧げることになったことによる。今回の祭りは、新しい牛を神に捧げるための特別な祭事だったのである。

昼の 12 時近くになると、村人が供物を籠に入れて背負い、各家から登って集まってくる。祭りには村人のほぼ全員が参加する。村人が集まると、祭司が呪文を短く唱えて神々に祈願し、小麦粉を振りまく。村人はブロパとブロモを先頭にして、供物を入れた籠を担いで行列を組み、掛け声をかけて動き出す。山上の広場から村の中を歩いて下る広場に出て、そこからラブランがある小高い丘に向かって登りかえす。丘の上の森に到着すると、供物を三方を草と竹で仕切られた聖域、ラブランの奥の山側に供える。後方にそびえる樹木はヒンブーというコナラ属の樫の古樹である。左右に幡をたて、両端に二匹の牛（シャーラップ）を繋ぐ。牛は二つの山の神それぞれへの供物である。かつては動物供犠が行われていたかもしれない。山の神のフーへの供物（サッカブ）は二神に対してバナナの葉で包んだまま解かず竹から下げて置く。

## 11 祭場での踊りと占いと神送り

3 人のブロパと 2 人のブロモという男女のセットが祭りの主役である。ブロパとブロモは、丘の斜面の上に立ってラブランに向かって一列に並び、年長のブロパの神歌に合わせて、体を少し左右に揺らしながら踊る。動きの少ない小刻みの所作で構成されている（写真 13）。ブロパとブロモの踊りは午後 2 時 30 分まで続いた。その後、休憩となり遅い昼の食事と宴会になる。親族や親戚が樹の下に集い、各家で用意してきた家庭料理を頂く。食事が終わると、村人はサイコロ賭博に興じる。普段は集まることのない村人が 1 年に一度集まって、楽しいひと時を過ごして娯楽に興じる日である。食事の席には道化も現れる。神の力で啞者（オシ）にされたという道化のムロアクーで、頭に木の葉を乗せ腰には男根をかたどった木を下げ、杖をつき「ウエードモー」と叫び声をあげて人々の間を廻り歩いて笑いを誘う。フーのお使いともいわれる。ムロアクーから病氣治療を受ける子供もいた。ロウ・セーボの祭りは、子供の多産、家族の繁栄、作物の豊穰、家畜の多産、川魚の恵み、健康を願い、山の恵み



写真 13 ラブラン ブロパとブロモの神歌と踊り



に感謝する儀礼である。

午後3時30分から神占いが始まる。バナナの葉に包んだ山の神への供物（サッカブ）の包みをほどいて、中身を地上にぶちまけて、祭司に神意を判断してもらう（写真14）。直接に神の託宣を得る。供物の中身は、蕎麦（ジュームー）、トウモロコシ（ピチィ）、米（ツウツェー）で、地面にぶちまけた時に、穀粒の山に穴が開いたり、二つに分かれたりするのは不吉とされる。最後に祭司が数粒とって呪文を唱え、お告げの神意を知らせる。祭司3人が担当して家の代表者に託宣する。穀粒の山は、山の神の2つの神を表わし、家ごとにどちらかが守護神になる。それぞれの穀粒の前に座って山の神のお告げを聞く。最後にリーダーの祭司が男根の作り物をつけた啞者と共に前にたち、ジャンバンという葉の紐を祭具にして、自らを清める。祭場内に穀粒を振りまいて巡っていく。人々は山の方向に立って穀粒をまく。神送りである（写真15）。

儀礼はまだまだ続く。夜になると占いに使った穀粒を、神に捧げる二頭の牛に与える。しかし、牛は生の穀粒を好まないで鳥たちが啄む。そして、牛の綱をほどいて森の中に放つ。牛は神、フーの乗り物で神送りとなる。元々は牛を供犠して神に捧げたのかもしれないが、村人は語らない。二頭の牛を森に放つことは供犠の代替の方式かもしれない。

最後に暗闇の中でフーを山に送り返す。祭司の一人が着衣を全て脱いで素っ裸になり、シャルガングリ・ヌンベン（sargangri nunben）を行う。シャルガングリは雪山、ヌンベンは送る意味だという。遠くの白雪に輝くカント峰（東ヒマラヤ）まで道中無事でお帰り下さいという願いを籠める。残念ながら極寒の山上で体力は尽き、最後の神送りは見られなかった。ここまでの限界であった。フーバーによれば、真夜中に真っ裸の男が熊に扮して、木の男根を吊るした啞者（mashee）と共に、祭壇の木の罫にかかった熊を捕まえる様子を演じ、獲物



写真14 ラフン 供物による神占い



写真15 ラフン 最後の神送り



を神に捧げるのだという。啞者にはマンジャンマニが憑依する[Huber 2020: 547-548]<sup>37)</sup>。これは狩猟儀礼で、かつての狩猟採集時代の生業の究極の願いを再現したのである。最後の儀礼の正式名は、シャルガングリ・カルポ・ソイシェー (Shar Gangs-ri- dKar-po söshe)、「東方の雪山の崇拜」だという。ナムシュやテンパンの祭りと同様に、神のソイシェー（崇拜、慰撫）が目的であった。

## 12 ラフン村の祭りのその後

神は毎日招かれて送られるという。聞書きによれば、3 日目には祭司は再び神招きを行い、クランのうち、ナンポー、タドゥン、チレン、サンブムの全戸を巡って、家族の安全と健康の祈願をする。4 日目は祭司がクランのうち、カシ、パボン、ペイギーの全戸を巡って祈願をする。5 日目は最後の祈願を行う。6 日目（1 月 19 日）は神送りで、村人が兵士（マクペン）の格好に扮し、兜を頂き 12 本の赤布を垂らし、顔を黒く塗って登場し、槍を持って踊りながら、病気や不幸をもたらす悪霊を追い出す。丘の上の彼方まで追いかける。平原から病気が来ないようにアッサムの方を目掛けて悪霊を追い祓うのである。兵士一人に従者一人がつく。戦闘の踊りに擬した神送りでもある。さらに、1 月の最後の日には山羊を供犠する。供犠は年一回の祭りの最後のみに行う。

ロウ・セーボと同じ内容の祭りは、近辺ではジェリガオン村がラフン村と同日に行い、サラリ村は 1 ヶ月前に終了し、コイナ村は 1 月末に行う。祭りには禁忌があり、ラフン村では全戸が祭りの 1 日前からは、玉葱、大蒜、鶏肉、豚肉、牛肉を食べてはいけない。祭りは 5 日間で、終了日の翌日まで禁忌は続く。祭司の禁忌は厳しく、10 月から 1 月まで 4 ヶ月間、納豆、玉葱、大蒜、牛肉、卵、鶏肉、豚肉を食べてはいけない。この間、川魚、ヤクの肉、羊の肉は食べられる。祭司は 4 ヶ月間は完全に山の神に奉仕し、村を離れることはできない。村の 3 人の祭司のうち 2 人は 84 歳で、次の世代への祭りの継承はかなり危ぶまれている。最後の記録をкаろうじて書き留めたような気がしている。

## 13 モンパの民間信仰の研究

筆者は 2019 年 3 月タワン（北東インド）、同年 7 月メラ（東ブータン）、2020 年 1 月ディラン（北東インド）を訪ねた。訪問はいずれも短期間であり、モンパの全容と詳細はブータンを 30 年間、アルナーチャル・プラデーシュを 15 年以上に亘って調査してきた脇田の研究成果[脇田 2019]を参照されたい。モンパは、言語や歴史の異なる人々から構成され、集団

37) 儀礼終了後に、獵師に扮した男が木に登り、下枝に光を当てて蜘蛛を探して存在を確認する。蜘蛛は獲物の「魂」で、儀礼の間、木に宿り全動物の生と死を統御すると信じられている[Huber 2020: 547-548]。同様の儀礼は、タニ語 (Tani) を話す山地民でも行われる。

ではなくカテゴリーで民族集団としては捉えられない。言語は大別すると、ディランはツァンラ語、タワンはモンケット語、メラはブクロバ語である。タワンとディランでは言葉が違うので、相互の会話にはヒンディー語を用いる。イギリス植民地下のインドで、徐々に共通の衣服が整えられ、言語も民族も異なる人々が類似した衣装をきて、モンパと呼ばれることになった。

東ブータンやアルナーチャル・プラデーシュの研究は、近年大きく研究が進展し、ボットやフーバーの業績〔Bodt 2020; Huber 2020〕がまとめられた。フーバーはこの地域の民間信仰に、仏教以前のボン教の影響を認めるが、中央チベットのツァンやアムドなどでの体系化されたユンドウン・ボン (yung drung bon) に対して、シーパイラー・ボン (sri pa' I lha bon) と呼んで区別した〔Huber 2020: 13-41〕。天空の神ラーの信仰が強く、従来のボン教とは異なる地域的な信仰で、東ブータンや、アルナーチャルのタワン県・西カメン県のモンパやツァンラ話者の村で維持されてきた。ディラン・サークルには、シーパイラーの祭りに関わる世襲的なボン教のシャーマン (bon po) のリネージ (lineage) はあるが、テンバンのラーソイシェーには存在しないという〔Huber 2020: 441〕。テンバンの祭りをボン教とすることはできない。

ラフン村の民間信仰については、2003年1月3日から5日まで調査したドウッタの論文〔Dutta and Tripathy 2008: 274-285〕があるが内容は乏しい。最大の問題は、モンパが古いボン教を残存させてきたと考えたことである。チベットでの構図を遠く離れたアルナーチャル・プラデーシュにも適用したに過ぎない。この地域では、外部の学者や行政官が訪問してからボン教言説が広まった。日本人では2008年から2011年にかけて調査をした水野一晴の業績〔水野 2012〕があるが、モンパをチベット人とする大きな間違いを犯している。ディラン地域のモンパはチベット語は解せず、自らの言語を表記する独自の文字はない。モンパの村々にはチベット仏教寺院のゴンパが建てられ、仏教の影響は深く浸透し法要も盛んであるが、彼らの民衆世界は独自である。水野はディラン地域ではボン教が根強いと言うが、テンバンにはボン教はない。あくまでも、山の神のフーや天空の神のラーの信仰である。仏教以前の信仰を単純にボン教とする見解は再考を要する。また、水野は先住民の世界をアニミズムの信仰者「アニミスト」と一括した。これによって近隣のアカやミジ、北東部のアパタニ、東部のナガランドの諸族も全て「アニミスト」になり差異は消滅する。アニミズムは西欧由来の偏向のある概念であることは意識されていない。さらに、水野の著作では文献と聞き書きが混在して区別が難しい<sup>38)</sup>。モンパの多様な世界は、文化が重層化し歴史的経緯も錯綜してお

38) 水野の著作〔水野 2012〕は、2015年3月に日本地理学会賞（優秀著作部門）を受賞した。生態調査は優れているが問題点や間違いが多い。ディラン地域に限れば、民間信仰をボン教と規定し、チベットのボン教研究に頼ったことで、二重の間違いが生じた。

り詳細な検討を要する。

#### 14 モンパの行方

モンパの居住地は、インド・中国・ブータンの国境に跨がり、政治状況は複雑である。中国は 1914 年 3 月に設定されたインドとの国境、マクマホン・ラインを承認していない<sup>39)</sup>。戦後、1947 年 8 月 15 日に独立したインドは、1954 年にこの地に行政区として NEFA (North East Frontier Agency 北東辺境管区) を設置して辺境省の管理下に置いた。1959 年 3 月 17 日にラサを脱出したダラ・ラマ 14 世は、国境を越えてこの地区に入り、ゼミタンからタワンを経て、セ・ラ峠を越えてディランへ、ラフンを経てボムディラーを経てアッサム平原に出てインドに亡命した[Losel Nyinje Charitable Society 2017; 脇田 2020a, 2020b]。その後、1962 年 10 月下旬には、中国の軍隊が国境を越えて南下し、タワンやディランも中国軍に占領されて多数の死者が出たが、中国軍は 11 月 22 日に停戦宣言を行って撤退した。1987 年 2 月 20 日、インドは連邦直轄地であったアルナーチャル・プラデーシュを州として昇格させた。しかし、中国は現在もマクマホン・ラインとアルナーチャル・プラデーシュ州の存在を認めておらず、中国領と主張している。アルナーチャル・プラデーシュ州は、中印国境紛争が継続してきた政情不安定な地域なので、アッサム州との境界にはインナーライン<sup>40)</sup>を設置し、州内への入境には外国人・インド国内居住者を問わず、特別な許可書が必要である。

中印国境を巡っては小競り合いが続いてきたが、2020 年 6 月 15 日にはインドのラダック地区のガルワン渓谷で、中国軍の兵士が国境を越えて争いがおこり死者が出た。その後、中国はインド国境の各地で動きを活発化している。ブータンに関しても、東ブータンのサクテン郡の領有権を主張し始めた。途上国の環境保護を支援する国際基金「地球環境ファシリティ」の 6 月上旬のテレビ会議での事だった。議事録によると、ブータンが助成を申請した同国東部「サクテン野生生物保護区」(Sakteng Wildlife Sanctuary) を巡り、中国代表が「保護区は中国とブータンの国境画定協議で議題になっている紛争地域だ」として異議を訴えた<sup>41)</sup>。全く初めての主張だという。保護区はメラとサクテンを含む 650 km<sup>2</sup> に及ぶ広大な地域で、アルナーチャル・プラデーシュ州のタワン県と西カメン県に隣接する。

39) イギリス、中国、チベットによるシムラ会議で、イギリス全権マクマホン (Sir Arther Henry MacMahon) とチベット全権との間で結ばれたインド北東部とチベット間の境界線で、中国はチベットは属国と主張して正式の署名調印を拒否した。インドはその後も国境線と主張したが、中国は認めていない。

40) イギリス統治時代の 1873 年に始まり現在に至る。山地民に干渉しない政策であった。

41) China doubles down on claims on eastern Bhutan boundary, by Suhasini Haidar "The Hindu", 2020/7/5.

<https://www.thehindu.com/news/international/days-after-demarche-china-doubles-down-on-claims-on-eastern-bhutan-boundary/article31993470.ece> (2020/11/23 確認)

中国は西ブータンのトルサ河（Torsa River, Amo Chhu）沿いに森林を伐採して開拓村を建設して「ヒマラヤ村」と命名し、24戸の建物にすでに数100名が移住したという<sup>42)</sup>。何本かの道路も造成され、離れた場所に建つ建造物は武器庫ではないかと推定されている。2019年12月に工事を開始し、2020年10月1日の国慶節に合わせて、「ヒマラヤ村」は完成し、国慶節を祝ったという。衛星写真も公開されて現状が確認できる。

2020年3月以降、中国湖北省武漢に発生した新型コロナウイルスの感染拡大が世界中に広まる不安定な状況を利用して、中国は各地で勢力拡大を試みようとしている。「辺境の民」モンパは、政治の動きに翻弄される「国境の民」となり、世界情勢と連動して生きていくことを迫られている。

## 謝 辞

モンパの調査では脇田道子さんの多大の援助を得た。深く感謝申し上げたい。

## 参 考 文 献

小林尚礼

2013『森のチベット』アルナーチャル・プラデーシュ州西部における自然信仰の聖地の今とその特色』『ヒマラヤ学誌』14号、140～155頁（『森のチベット』における自然信仰の聖地）安藤和雄編『東ヒマラヤー都市なき豊かさの文明一』京都：京都大学出版会、247～271頁、2020年・再録）。

鈴木正崇

2020「インド北東部アパタニ族フィールドノートーミョウコウ祭を中心として」『白山人類学』白山人類学研究会、23号、267～288頁。

水野一晴

2012『神秘の大地、アルナチャルーアッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会一』京都：昭和堂。

水野一晴

2020「モンパ民族地域に見られる『悪霊』と儀式」安藤和雄編『東ヒマラヤー都市なき豊かさの文明一』京都：京都大学出版会、273～300頁。

42) “Beijing Takes Its South China Sea Strategy to the Himalayas”, New York Times, India, Nov. 27, 2020.

<https://www.nytimes.com/2020/11/27/world/asia/china-bhutan-india-border.html>



脇田道子

2019 『モンパーインド・ブータン国境の民—』京都：法蔵館。

脇田道子

2020a 「ダライ・ラマ法王の NEFA における 19 日間の足跡—中印国境からアッサム平原までの脱出行（その一）—」『チベット文化研究会報』170 号，チベット文化研究会，6～10 頁。

脇田道子

2020b 「ダライ・ラマ法王の NEFA における 19 日間の足跡—中印国境からアッサム平原までの脱出行（その二）—」『チベット文化研究会報』171 号，チベット文化研究会，12～16 頁。

Bodt, Timotheus A.

2014a “Ethnolinguistic Survey of Westernmost Arunachal Pradesh: A Field Worker’s Impressions”, *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 37(2): 198-239.

Bodt, Timotheus A.

2014b “Note on the Settlement of the Gongri River Valley of Western Arunachal Pradesh”, *Bulletin of Tibetology*, 50(1&2): 153-190.

Bodt, Timotheus A.

2020 *Duhumbi Dictionary Duhumbi Tshikze*, Arnhem, the Netherlands: Monpasang Publications.

Dutta, S. and Tripathy, B.

2008 “Bon Cult among the Monpas of Arunachal Pradesh”, in B. Tripathy. and S. Dutta(eds.), *Religious History of Arunachal Pradesh*, New Delhi: Gyan Publishing House: 274-285.

Huber, Toni

2020 *Source of Life: Revitalisation Rites and Bon Shamans in Bhutan and the Eastern Himalayas*, 2 volumes. Vienna: Austrian Academy of Sciences.

Losel Nyinje Charitable Society ed.

2017 *Crossing of the Frontier: The Exile Route of His Holiness the 14<sup>th</sup> Dalai Lama-1959*, Tawang: Losel Nyinje Charitable Society.

Pertin, Batem

2014 *Ethnic Communities of Arunachal Pradesh*, Itanagar: Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh.

鈴木：インド北東部ディラン周辺のモンパ族フィールドノート